

現代文学秀作シリーズ

婉という女

大原富枝

講談社

という女

大原富枝



講談社



婉という女

昭和46年5月20日 第1刷発行

昭和46年7月20日 第3刷発行

著者 大原富枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112

電話東京(945) 1111(大代談)

振替東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 鈴木製本株式会社

定価 450円

© Tomie Ohara 1971, Printed in Japan

蔭丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-134659-2253 (0) (文1)

目次

第一章	赦免ということ	5
第二章	憎しみの意味	44
第三章	見ぬひと	69
第四章	生きること	110
第五章	挽歌	166
解説	上田三四二	196

装 幀——大沢 昌助
卷頭写真——野 上 透

婉
と
い
う
女

第一章 赦免ということ

今日、安東家からお使者が見え、藩府からの赦免状を受けた。

お使者の帰ったあと、母上を中に、乳母、姉上、妹と相擁して泣いた。

泣くまい、泣くことはしまい、泣くこととは遠い気持だ、と思いながらも、涙がしだらなく流れてくる。

八十を越えた母上と、六十五歳の乳母、姉妹たちもみんな四十をすぎた老嬢ばかり、こうして相擁して泣いている涙も一人一人が別であった。——いや、わたくしだけが、みんなと異う気持かも知れない。

「おめでとうございます」と、みんながいいあって泣くのが、わたくしの気持には素直に沁

みてこない。わたくし自身も母上にはそう申しあげたけれど――

七十五日前の六月二十九日に、弟の貞四郎どのが亡くなってからは、今日の日のあることをみんな心待ちしていた。誰よりもわたくしが、殊に待っていた。心が灼けるように待ち兼ねていた。

弟が死ねば赦免がくる、ということ、わたくしは信じていた。

貞四郎どこの病が重くなり、とても恢復の望みの持てなくなったとき、彼もそれをよく知っていた。

わしが死ねば赦免がくる、姉上、それだけがわしにできる孝行らしい……

と彼はいった。

――なにをいわれる、いまごろになっての赦免がなにになりました、母上もわたくしたちも年とりました、変ったことが起るといことがいまは不幸ということなのです。このまま、このまま、何事も変らず、何事も起らずに暮せることが仕合せです。何よりも生きねばなりません。お前さまが元気になって、生きてくれることです。

と、わたくしはいった。

ほんとうにわたくしはそう考えていた。四十年を過してきたこの獄舎に、これからも生きてゆこう。五十になっても六十になっても生きている。七十歳になっても、母上のように八十を越しても、わたくしはここに生きていようと考えていた。

そのことにひとつの痛烈な皮肉——誰にでもない、わたくし自身に対しての——のよう
な、歎びのような、安らぎのようなものさえ感じていた。

「野中婉、四歳にして獄舎に囚われ、九十歳の生涯をここに置く」

もしも墓碑銘を刻むことが許されたら、そう記して貰おう。ここに生いくではなく、置おく
と。わたくしは遂に生いきたことはなかったのだ。

弟を死なせたたくない、死なせたたくない、とわたくしは真実ねがっていた。

弟は生後わずかに五ヵ月のとき、乳母に抱かれて獄舎に囚われの身になった。そうしてい
まは四十歳の男になり、死のうとしている。

門外一步を禁じられ、結婚を禁じられて、四十年間をわたくしたちはここに置かれた。他
人との面会を許されず、他人と話すことを許されないで、わたくしたち家族はここに置かれ
ていた。

わたくしたち兄妹は誰も生きることはしなかったのだ。ただ置かれてあったのだ。

けれども弟がいま死のうとしていることはたしかであった。この近づきつつあるものが死であることは、わたくしたちはよく知っている。

四十年の間に、わたくしの兄弟は次々に死んでいった。

数え年四歳で幽居に入れられたわたくしと、妹や弟は、「生きる」ということがどのようなものなのか知らない。

しかも死というものは、「生きる」ことを許されなかった人間にも、確実に訪れるものであった。

ここでは、死は、生きるということがどういふことであるかを、よく知っているものからの順で、訪れた。

姉上は兄妹のうちでは一番年上で、十八歳であった。二年前に藩士の高木四郎左衛門などに嫁し、愛し子も一人生れていたけれど、夫と子供から引き裂かれて、父上の血を受けた娘として罪囚のなかに加えられた。

兄妹のなかで、まず、生きたといえるのはこの姉上だけである。そして死は一番先に姉上

に訪れた。

それでも姉上は三年間をここで生きていた。姉上がこの三年間を生き堪えたことは、姉上が生きているということがどういうことであるかを知っていたからであり、三年間以上を生き耐えることができなかったのも、生きるということの意味をすでに知ってしまったていられたからなのにながいない。

姉上が亡くなってから十二年目に、長兄清七どのが亡くなられた。三十一歳であった。

それから四年目に次兄の欽六どのが亡くなった。さらにそのあと十五年の歳月が流れた元禄十一年、わたくしの敬愛して止まなかった三兄、希四郎どのが逝ってしまった。

弟はいまは野中家に唯一人残った男子であった。そうしてその貞四郎どのが死のうとしている。死なせたたくない、とわたくしは必死にねがった。

しかし、弟が死ぬにちがいないこともわかっていた。わたくしはこの幽居に、たくさん死を見てきた。死の貌を、わたくしはよく知っている。

貞四郎どのは、僅か五ヵ月自由な空気を吸っただけで幽囚の身となり、四十一歳で死んでいったのだ。わたくしは息も望りそうなほど悲しく哀れでならなかった。

けれど母上が、これでもう野中家も絶えた、生きて甲斐なし、一緒に死のう、といったとき、わたくしは勃然と憤ろしくなった。

わたくしは生きてゆくつもりだ。八十までも九十歳までも生きてゆく、と思った。

母上の自害を思い止まらせるために、わたくしはさまざまのことを口走って慰撫しなければならなかった。

いまここで母娘姉妹自害して果てては、哀れな弟の死骸を覆うてやる人もない。父上や次に死んでいった兄上たちの霊を慰める手段もない。わたくしは生きて赦免を待ち、野中家の死者たちのための家をつくりたい、と口説いた。

口説いているうちにわたくしは自分の心が赦免のくることを信じ、待つ気になっているのに気がついた。

赦免になって、新しい世界へでて行って、ほんとうに生きることができ、始めて生きることができ、とわたくしの心は燃えはじめていた。

それからの二カ月余りの日々は苦しかった。今日か、明日か、と赦免を待つ心は、この四十年の、わたくしがここに置かれて、あつた歳月よりも息苦しかった。

生き残った三人の姉妹のうち、姉上と妹は同腹のきょうだいであつた。

二人はわたくしのように赦免を待ち望んではいなかった。——ほとんど迷惑に思つていた。彼女たちはいった。

いまさら自由になつて何としましょうぞ、路頭に迷うばかりでございます。このまま、生涯をここで終る方がようございます。

見たこともない新しい世界への不安と怖れは、勿論わたくしにもあつた。ましてこの四十をすぎた異腹の姉妹たちは、もはや生涯を終つていた。一度も生きることなく、彼女たちはすでに生涯を終つていた。

わたくしはちがう。わたくしはこれから始めて生きようとしてゐるのだ。赦免を待つて高知の城下町に帰ること、あの方に逢うことができること——

わたくしの魂と胸はいつも小波立つていた。そしてそのことを二人の姉妹たちに用心深く匿かくしてゐた。わたくしは秘かに信じてはいたけれど、ほんとうに赦免がくるものかどうかは誰にもわからなかつた。

その赦免がついにきたのだ。

みんなが昂奮していた。赦免を待つてはいなかった、ほとんど迷惑に考えていた姉上と妹も、いまは烈しく揺すぶられていた。

幽囚のうちに死んでいった兄弟たちの霊に燈明をあげ、わたくしたちは夜が更け果てるまで話しあった。五人の、二人は老い果て、三人もまた決して若くはない女たちは、泣き疲れ、しゃべり疲れて、明け方近くなってから、二つの部屋に分れて寝についた。

母上は疲れ果てたように、間もなく破れた草笛のような、かすれた小さい寢息を立てて眠った。

わたくしは暗闇の中で微かに笑いが浮んできた。

ついに赦免がきた。

——父上という一人の激越な理想家、理想を追って短い生涯をお仕置（政治）に賭けた男の、血に對するあの人々の執拗、無残な憎しみも、ついに止む時があったのか。

わたくし自身さえ、敵ながらいっそ見事だと感服した、あの父上の政敵たちの、徹底した

憎しみの執拗さにも、最後にきて、この一点の感傷と脆弱さがあったのか――

いや、彼の人々にとつては、こんどの赦免は、決して彼等の、父上の血に対する徹底した憎しみの執拗さを傷つけるものではないのだ。感傷などではさらさらない。

男系絶えて野中家の血が絶えた、という解釈なのだ。四十を越す姉妹三人が残っていると、どうして姉上の産んだ女兒が高木家に残ることが許されたであらう。

彼等にとつては、わたくしたち姉妹を幽囚として番兵をつけて警戒することが、いまは無意味になったのだ。それだけのことなのだ。

わたくしたちは、ほんとうは人間の数にもはいってはいなかったのだから。――皮肉な笑いがわたくしの口に浮んでくる。

結構でございます。お仕置（政治）だの、権力だのには、わたくしは何の興味もございません。わたくしはただそつと片隅で生きてみたいのでございます。一度だけ、生きてみたいのでございます。

あなた方は何も恐れるはずもございません。たかが四十女の一人、精いっぱい生きてみ

たとて、何の恐れることがございましょうか——

可哀そうな三人の兄上たちと、そして貞四郎どの、あなた方は男であつたから、赦るされなかつた。たとえ五十になろうと、六十歳になろうと、あなた方が生きてある限りは、赦免は訪れなかつたはず。

あなた方は、男であつたから死ななければならなかつたのです。わたくしを生かして下さるために——

女であるわたくしは、いつそ氣樂に生きてみせましょう。四十の老嬢おんながどんなふうに生きられるものか、わたくしにもまるつきりわかりませんけれども、ともかく生きてみましよう——

わたくしは若くて死んだ異腹の姉上を慕わしく思う。顔はよく憶えていないけれども、色の白い静かなひとだつたように思う。わたくしは幼かつたし、姉上は悲惨な運命にたたきつけられた日頃であつたのだから、この「静かなひと」という印象は、本来の姉上とはちがつたものかも知れない。

ただ一つわたくしに鮮かに残る記憶がある。姉上の乳房のこと——